

草津市立矢倉小学校通信 令和2年11月2日 NO.14



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

言い訳

「だって、行けと言われたから行ってるだけや。」

これは、野球に日々の生活をささげている甥っ子しんちゃんが、父親から「塾に行かしてやっているのに成績があがらないのはどういうことか」と詰め寄られ、とっさに答えた言葉である。しんちゃんとしては、成績については、これまでからそれほど良かったわけでないものの、今回だけは、それなりにがんばったつもりだった。本人自身、これではたしかにまずいなあと受けとめていたのだが…。結果、この言い訳を受けて父親の怒りはますます高揚したのだった。

甥っ子しんちゃんに限らず、およそ筋の通らない言い訳はたしかに快く思えない。だからといって、正面切ってダメだと叱りつけても、どうにもならない。本人自身、ただでさえおもしろくもないことをさせられ、ほめられもせず、ダメだ、なってないと、けなされてばかりでは、たまったものではない。こんなつらいことからいつになったら抜け出せるのか…。こうして子どもは窮地に立たされ、支離滅裂な言い訳をしてしまうのである。

その一方で、大人たちの「それにしてもウチの子は…」とか「今どきの子は…」などと嘆きたくなる気持ちもよくわかる。子どもだったころ、同じように筋の通らない言い訳、口ごたえをし、大人たちを困らせていたにもかかわらず、立場が代わると同じように嘆いてしまうのである。

私が教師になりたてのころのことである。今は亡き父が、子育てについてしみじみと語ってくれた。子育てというのは、子どもに裏切られ続けながら、これを丸ごと背負っていくことだと。話を聞く私にもくりかえし裏切られ、落胆することがあったという。そんなときは感情に任せて白黒つけようとせず、時には封印をしておくことが、子どもにも親にも大切なことで、時間をかけてそれぞれが自分の問題としてすなおに受けとめていかねばならない。その上で、少しずつやりなおしていこうと向きなおらない限り、親も子も、まわりの者も、いつまでも苦しむことになる。妙な意地を張らずに、乗り越えなければならぬ自分の問題だと整理づけていく時間が必要なのだ。これは、お前たち3人の子をいただき、だんだんとわからせてもらったこと…。そんな話だった。

だって…と、開き直りの言葉を発した甥っ子しんちゃんは、その後、じっと自身のこれまでのこと、これからの歩み方を考え出した。怒りに駆られていた父親も感情に走らず、じっくりと思いが伝わるようなかわり方を探りだした。

「子育てというのは、子どもに裏切られ続けながら、これを丸ごと背負っていくこと」ここに込められた父の思いをあらためてかみしめている。

校長 大林道範